

「イタリア共和国カンパーニャ州ソンマ・
ヴェスヴィアーナ市に所在するローマ時代遺跡発掘調査」
火山噴火罹災遺跡における
環境の復元研究

助成団体
東京大学ソンマ・
ヴェスヴィアーナ発掘調査団

東京大学が平成14年(2002年)より実施している、イタリアの「ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡」の発掘調査。考古学、美術史学をはじめ、西洋史学、火山学、地理学、植物学等、様々な分野の研究者が参加し、“火山噴火罹災からの環境の復元”を目指した研究を行っている。多くの貴重な発見により世界的評価を得ているこの発掘調査を評価し、経費の一部助成を行った。



「第二のポンペイ」での発掘調査活動

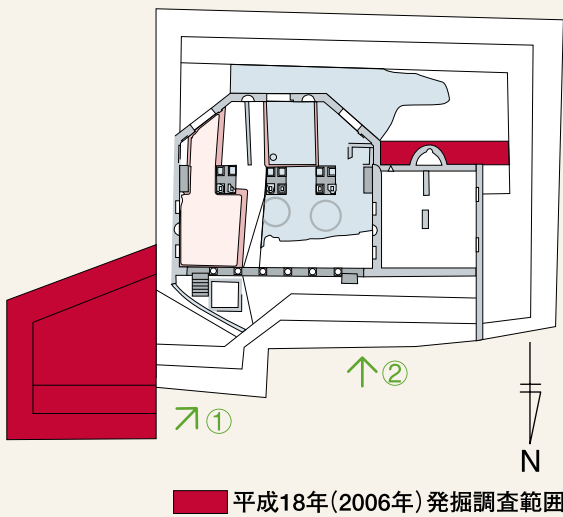
イタリア南部・ヴェスヴィオ火山の北山麓に位置するソマ・ヴェスヴィアーナ遺跡。火山を挟み、反対の南側に位置する古代都市遺跡「ポンペイ」と同じく、噴火によって埋もれたローマ時代の遺跡である。昭和5年(1930年)頃、地元の農夫が偶然に古代の建造物を見つけたことにより存在が明らかになったという。

発見後、数年にわたって行われたソマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の発掘調査は、昭和10年(1935年)、資金不足のために中断を余儀なくされる。初代ローマ皇帝の別荘であると目され、その重要性を認められながらも埋め戻されてしまった遺跡は、実に70年もの時を経て、

東京大学の発掘調査団によって再び姿を現したのだった。

平成13年(2001年)の予備調査を経て、平成14年(2002年)から継続して行われている発掘調査では、数々の貴重な建造物や彫像が見つかっている。平成18年(2006年)の調査では、遺跡中の建造物の全体構造把握に向けての調査を実施し、主要な建物のおよその創建年代が特定できた。同時に、3～4世紀頃のものと思われるギリシア神話の世界を描いた美しい彩色壁画が発見され、同遺跡が宗教的な意味合いを持った公共建築の一部である可能性が高まったという。

ソマ・ヴェスヴィアーナ遺跡 俯瞰図



平成18年(2006年)の発掘調査は、遺跡の主建築の北東側と、遺跡南西部分で行われた。北東部で出土したドーム形の遺構からは、美しい壁画が発見された



	平成18年(2006年)										平成19年(2007年)		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
イタリアでの活動		調査準備	調査準備	発掘調査				遺跡整備		現地発掘資料整理	各種処理		
日本での活動		調査準備								調査成果整理			
										多分野研究成果検討	シンポジウム		

平成18年度 ソマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団 活動スケジュール

平成18年度は、7月～10月にかけて遺跡の発掘調査を実施。発掘前の準備期間や、発掘後の遺跡整備・成果のまとめ等に入念に時間を費やしていることが分かる。



平成18年(2006年)の発掘で出土した色鮮やかな壁画。紀元3~4世紀に描かれたとみられている

火山噴火罹災からの環境復元とは

平成15年(2003年)、ローマ時代の人物彫像「ディオニュソス」と「ペプロフォロス」が発見され、そのニュースは世界各地に伝えられた。2体の彫像は平成17年(2005年)の愛知万博で展示されるなど、活動の成果は国内外で大きな注目を集めている。しかし、この発掘調査は考古学・美術史的な発見に偏ったものではなく、「火山噴火罹災遺跡における生活・文化環境の復元研究」が、ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団の真の目的である。発掘調査開始時から、調査責任者として作業を統括している東京大学・松山聡助教は、次のように語る。

「火山国である日本は、現在も、将来的にも、常に火山噴火の危険に晒されています。火山の噴火で埋もれた遺跡を調査しながら、罹災以前の文化・自然環境の復元方法を研究することが、私たち

の発掘調査のねらいです」

火山の噴火は周辺に様々な被害を及ぼす一方、ポンペイやソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡がそうであるように、堆積物によって、噴火する前の環境がそのままのかたちで永く維持されることがある。堆積物で密封された環境を調べ、噴火の前後でどのように環境が変わってしまうのかを提示することは、日本で罹災地が生まれてしまった場合の復興計画の重要な指針になるのだという。



松山 聡氏
東京大学大学院
人文社会系研究科 助教
東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ
発掘調査団 発掘作業統括者

活動代表の声



青柳 正規氏
国立西洋美術館 館長
東京大学名誉教授
東京大学ソンマ・
ヴェスヴィアーナ
発掘調査団 代表

ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団はこれまでの活動で、貴重な建物の数々や2体の彫像、そして平成18年(2006年)には横幅約6メートルにもなる壁画の発見等、多くの成果を上げることができました。平成19年(2007年)からは、第二次5か年計画に基づき、改めて遺跡の発掘調査を進めていく予定です。

現地では、私たちの活動を広く理解してもらうために遺跡を積極的に開放し、週末には市民のための説明会を開いています。年を経るごとに集まってくれる市民も増え、現地の方々から親近感を持ってくださることを実感しています。こうした交流のなかで「なぜ日本人がイタリアで発掘活動を行うのか」とよく質問されますが、

「日本もあなた方の国と同じく、過去の火山噴火で埋没した地域を数多く持つ火山国です。ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の発掘を通して、火山噴火に罹災した地域が少しでも早く復旧できる方法について研究しているのです」と答えることで、皆さん納得してくれます。

例えば日本では、群馬県の榛名山・浅間山噴火により埋没した黒井峯(くろいみね)遺跡や、鹿児島県の開聞岳噴火により埋没した橋牟礼川(はしむれがわ)遺跡等が知られます。私たちは、ヴェスヴィオ火山周辺とこれらの地域を比較研究しながら発掘調査を進めており、これは日本にとって重要な意味を持つ活動だと認識しています。

5年にわたる現地活動と交流が産んだもの

発掘調査の進捗状況や研究の成果は、日本とイタリアで順次発表・報告を行っており、平成14年(2002年)からは、遺跡の一般公開も行っている。イタリアでは、調査中の遺跡が広く公開されることは極めて珍しいため、この催しは現地からも非常に好意的に受け止められているという。公開に際しては、地元の文化団体の協力を仰ぎ、市民への説明、展示物の準備等、積極的に現地での交流を図った。

「幸い発掘調査はスムーズに進んでいますが、イタリアの土地を日本人が調べるとい活動ですから、当初から現地での折衝事には一番エネルギーを注いでいます。イタリア人と日本人とでは、言葉の問題はもちろんですが、時間概念の違いや商慣習等、様々な点で差があります。驕らず、おもねらず、良い関係を保ちながら活動を進めていくことは、異文化交流の意味でも重要なことだと感じています」

今後は引き続きの発掘調査のほか、報告書の刊行や、日本での展览会開催の準備にも着手していくという。また、発掘調査が完了した後には、遺跡を「公開遺跡公園」として公共利用することを目指し、イタリア関係当局と折衝を行っていく方針だという。

芸術的・学術の見地はもとより、日本人の未来についても寄与する活動として、着実に成果を上げているソマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の発掘調査。その功績が、いつか私達の住環境を救う日が来るかもしれない。



現地スタッフと発掘作業を行う松山氏



(写真上)平成15年(2003年)には、ペプロス(古代の服)をまとった女性の大理石彫像「ペプロフォロス」が出土
(写真右)同年に胸部から膝部と頭部が出土した「ディオニュソス」

“自然災害との共生”を考えさせてくれる活動



お茶の水女子大学
文教育学部 教授
鷹野 光行氏
専門分野:博物館学

現在、「火山噴火罹災地における文化・自然環境復元」を目的としたプロジェクト研究チームの1つとして、日本における火山噴火罹災遺跡の考古学的調査に携わっている。

ソマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団は、その研究手法の新しさから実に多くの成果を生み出しており、今後の同種の研究における、あるべき姿を提示しています。また、彼らが日本及びイタリアで行っている講演会や発掘調査現場の公開等は、研究者・一般市民を問わず、真の意味で学問の成果を還元

していると言えるでしょう。今後、一層の研究推進を通じて一般の興味をさらに喚起し、火山国である日本とイタリアが共に抱えている「自然災害との共生の在り方」についても考えられる機会をますます増やしていただきたいと思います。